

[名古屋大学教育発達科学研究科 2013 年度修士生・修士論文抄録]

大学の全学共通科目におけるキャリア教育に関する研究 —国立大学の講義科目と学習支援の連携について—

胡 暁 松

<修論要約>

大学設置基準が改正され、平成 23 年 4 月から施行された。大学や短期大学の教育課程の中でキャリア教育（キャリアガイダンス）を実施することが義務化された。

各大学が従来の進路指導を見直し、キャリアセンターを学内につくり、4 年間の正課授業の中で、体系的にキャリア教育に取り組む大学が増えてきた。しかし、これらのキャリア教育の内容は大学の通常の学部教育との連携は薄く、従来からの就職支援を除けば、従来の大学の取り組みに「新たに付加」されたものであり、従来の取り組みをキャリア形成支援という視点から見直し、改革していくものとはなっていない場合が多いと指摘されている（小杉礼子,2007, p.54-74）。行研究のなかで、特に国立大学におけるそれらの取り組みの貧弱さがよく指摘されている（吉本,1999, p.39-56）。また、国立大学においては中退者や卒業後の無業者が増え、フリーターになる学生が多くなってきている。その実態は学生支援を強化している私立大学に比して深刻である。大学の法人化に伴って、様々な改革が行われたが、国立大学においてとくに急を要する課題は、これまでの一般教育や専門教育、就職相談や学生指導などをつなげるキャリア教育の講義科目の整備であると指摘されている（社団法人国立大学協会 教育・学生委員会,2005,p.6）。

本論文では、国立大学の全学共通科目としてのキャリア教育に着目し、多くの大学で展開されているキャリア教育科目に関する諸資料を調べた上で、キャリア教育科目の位置づけ、目標設定、授業内容を明らかにするとともに、学習支援との連携の視点からキャリア教育科目の性格について考察した。

文献資料の整理を踏まえ、キャリア教育科目に携わっている教員を対象に、インタビュー調査を行った。調査結果の分析作業を通じ、その取り組みの背景、目標設定、授業内容、今後の取り組み、学習支援との連携の部分を明瞭にした。その結果は以下の通りである。

第 1 に、各大学のウェブサイト、シラバス、関連報告書などから収集した文献資料を考察した結果、以下のことが明らかになった。

(1) 各大学のシラバスなどに記載されている内容に基づき、キャリア教育科目の位置づけには、「体系的なキャリア教育の一部」、「初

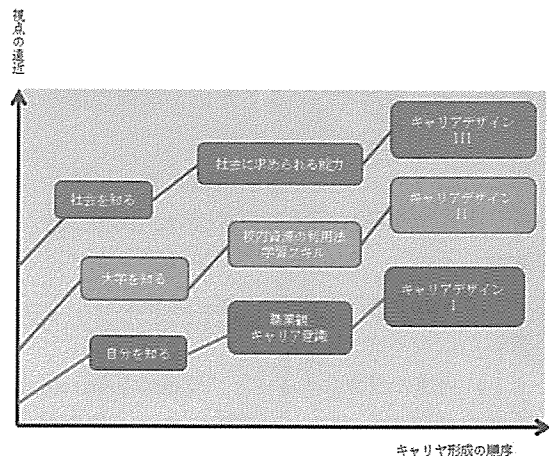


図 1 キャリア教育科目の全体像（筆者作成）

年次教育・教養教育」、「選択科目から必修科目へ」の3つのキーワードを抽出した。目標設定には、広い視野での目標設定が一般的で、具体的には「意識・態度」、「能力・資質」、「知識・視野」の3つに集中している。内容には、図1が示すように「自分」、「大学」、「社会」の3つの視点を取り、「知識の習得」から「能力の育成」まで、最後に「キャリアデザイン」に達するというプロセスが一般的なパターンであることを究明した。

(2) キャリア教育科目と学習支援との連携について、目標、内容から考察した。目標には、卒業して社会に出てからのことに焦点を置くだけではなく、大学での学習過程を見据え、大学内の教育にも資するようなキャリア教育が望まれているのが現状である。図2でキャリア教育科目と学習支援との連携を示す。

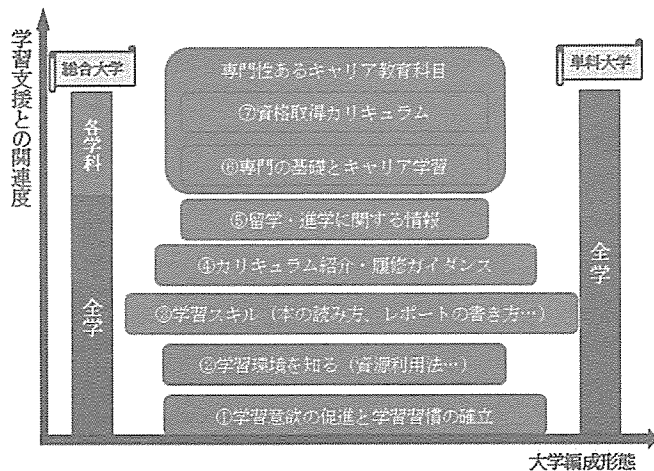


図2 キャリア教育科目と学習支援との連携 (筆者作成)

図2の縦軸はキャリア教育科目の内容と学習支援との関連度を示し、①から⑦までの順位は専門教育との関連度の強さを示す。上に上があれば関連度が強くなる。①の学習意欲の確立から、②③の学習のための基本スキルなどを経て、一番上にある⑥、⑦の専門性あるキャリア教育科目が関連度一番強い項目になる。学習の段階を考え、そういった順位をつけた。第一歩としての学習意欲の確立が学習のエンジンとなり、それから、学習のための資源の利用法、学習のスキルを身につけることが学習の基盤となり、さらに、学校内のカリキュラムを知り、留学や進学に関連する情報を把握した上で、大学で一番重視されている専門学習に入るというプロセスを想定し、順位をつけた。横軸で大学編成形態を示す。大学の類型から検討すると、総合大学の全学体制下のキャリア教育科目は段階⑤にとどまるのが一般的で、学習支援との連携が強い内容を各学科のプロがラムに委ねるのが現状である。一方、単科大学の場合、学生の方向性が似ているため、全学のキャリア教育科目においても、学生の専門性を配慮することが可能であるため、学習支援との連携がより強い内容を取り入れる環境が整う。

第2に4つの大学でキャリア教育科目に携わっている教員にインタビューを実施し、開講の背景、キャリア教育全体における位置づけ、目標設定、受講者像、授業内容、今後の取り組み、学習支援との連携、この7つのカテゴリーからインタビューの結果を整理し、分析した。また、得られた回答に基づいて、総合大学と単科大学を比較しながら、考察し、属性別に検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 開講の背景について、「政策の影響」、「支援状況」、「学内認識」、「学生の要因」、「社会情勢」が重要な要因になることが確認できた。位置づけには、「体系的なキャリア教育の一部」が4つの事例校において全て確認された。対象受講生には、「学生両極化への配慮」がはっきり見られた。目標設定について、「就職のため」という性格が見られず、「意識」、「資質・能力形成」に集中していた。

授業内容において、多く取り扱われているのは「キャリアモデル・他人体験談」と「社会、仕事に関する情報と知識」の2つである。今後の取り組みについて、「授業法」の改善がよく提起され、講義だけではなく、学生参加型の授業が期待されていることが分かった。学習支援との連携において、「専門教育への意欲促進」、「学習不適應学生への助言」、「各学科との連携」が中心となった。それ以外、「専門学習とキャリアの関連性」、「進学・留学への助言」、「学科意識の形成」にも言及された。

(2) 属性別に検討した結果、総合大学と単科大学では、7つのカテゴリーにおいて、特に明確な差は見られなかったが、キャリア教育科目を作り上げる際に、総合大学と比べ、単科大学のほうがより学生の専門性に配慮していることが分かった。一方、体系的なキャリア教育作りにおいては、総合大学のほうがより進んでいることが今回の調査対象範囲内で確認ができた。原因として、体系的なキャリア教育づくりの下地には、総合大学と単科大学の間でばらつきがあることと学生の特性がキャリア教育の性格に大きな影響を与えることが挙げられる。

今後の課題について、本研究は国立大学における全学共通科目としてのキャリア教育に着目し、学習において、大きな比重を占めている専門教育との連携を究明するために、補足的に各学科での取り組みを取り上げ、分析したが、実地調査において、対象科目は全学共通科目に集中し、調査協力者が多かれ少なかれ各学科の取り組みについて言及したが、それについての葉断片的で分析には不十分だと思われる。全学共通科目にとどまらず、各学科でのキャリア教育プログラムを研究・調査することは今後の課題である。

<参考文献>

- 小杉礼子『大学生の就職とキャリア：「普通」の就活・個別の支援』勁草書房、2007
- 吉本圭一「国立大学における学卒無業と就職指導体制」『九州大学大学院教育学研究紀要』、1999
- 社団法人国立大学協会 教育・学生委員会 「大学におけるキャリア教育のあり方 ―キャリア教育科目を中心に―」、2005